



## 古典の中の猫

『徒然草』で扱う次の教材は「猫また」の話であるが、以前「古典の中の猫」という文を教科書用に書いたことがあるので、それを紹介してみよう。

\*

猫はもともと中国産で、日本に中国から仏典類が輸入されるようになった時、船旅の間に貴重な仏典類が鼠の被害にあわないようにと、同乗させられるようになって渡来したと伝えられている。その後、天皇や貴族の日記の中に登場するようになり、貴族の間で愛玩されるようになったことがうかがわれる。

古典文学作品の中にも、多くの猫が登場する。『枕草子』には、「猫は」という段があり、

「上のかぎり黒くて、腹いと白き。」

と描かれている。「なまめかしきもの」の段には、赤い首輪を付け、組紐をリード(引き紐)とした可愛らしい猫が採り上げられているし、「上に候ふ御猫は」の段では、五位の位をもつ「命婦のおとど」という、一条天皇の愛猫も登場する。『源氏物語』では、若菜巻で許されぬ恋の物語が語られる際、その大きなきっかけとなる垣間見の機会をつくるという大役を演じている。

その後、人々に親しまれるようになるにつれ、その形象にもバリエーションが増えてゆく。『平家物語』では、木曾義仲の無骨な人柄を語るエピソードの一つとして、面会に来た都の貴族をもてなそうとして大盛りの食事を出し、恐れをなした貴族が形だけ箸をつけたところ、

「きこゆる猫おろし(猫が食べ残すこと)し給ひたり」

と言ってその貴族の不興を買うといった逸話が語られている。さらに『徒然草』には、

「猫の経上がりて(年を経て変化して)」

化け猫となった「猫また」まで登場するようになる。夜行性で身軽かつ野性的な猫は、番犬や狩猟犬として比較的人間の生活に溶け込んだ犬とは異なる面で、古人の想像力を刺激したのだろう。

\*

字数の関係でこの文では紹介できなかったが、君たちが2年生になったら学ぶ『更級日記』の中にも印象的な場面が登場する。

作者が15歳の時、どこからともなく一匹の猫が現れて、作者と姉は愛らしいその猫を飼うことにした。そのうち姉が病気になり、猫は使用人たちの部屋に移されるのだが、寝ている姉の夢にこの猫が現れて、自分は昨年身まかった藤原行成の娘の生まれ変わりであり、作者が深く哀悼してくれたのでそばにやってきたのだが、ここ数日は作者から離されて不本意であると語ったという。この話に感動した作者は、早速猫を手元に置いて今まで以上に愛情を注ぎ、話しかければ優しく鳴く姿にも、行成の娘を幻視するようになる…。

なかなかいい話で、素敵な場面の多い『更級日記』の中でも私の好きな場面なのであるが、残念ながらこの猫、翌年の火災で焼死してしまうのだった。

『源氏物語』若菜巻の「許されぬ恋の話」での猫の役割もおもしろいのだが、それは諸君がもう少し「大人」になったらね。